

船、奔別炭鉱は住友系列の会社によって経営され、中小炭鉱を含める

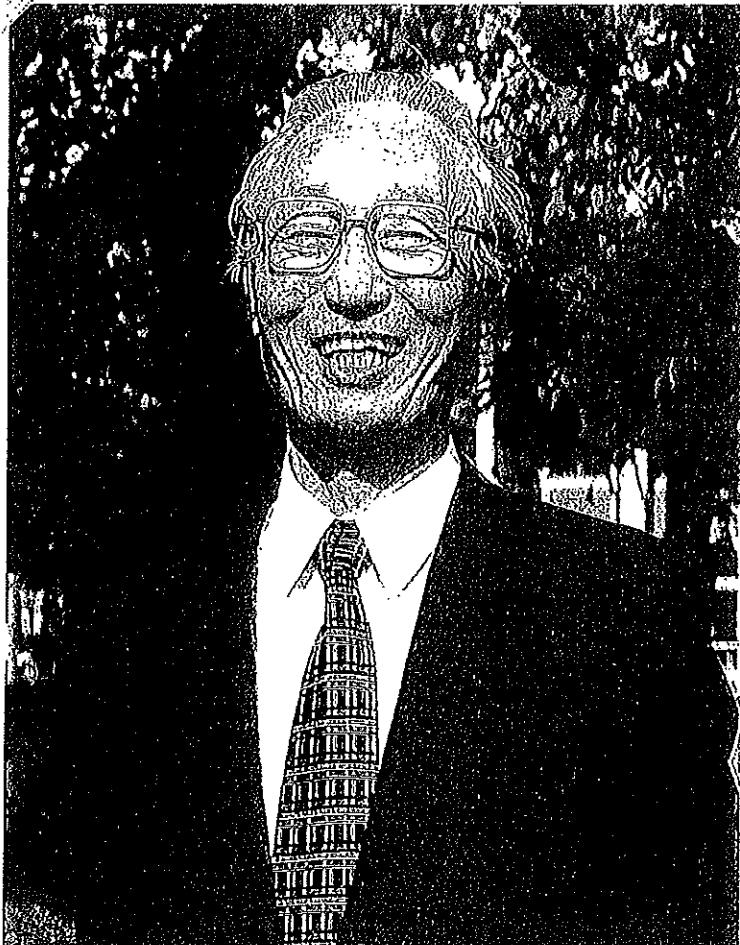
# 火坑と生きとし生きた文化

## インタビュー

森田 光男さん  
三笠北海盆おどり実行委員会 委員長

1935年、新潟県中条町に生まれる。'50年に三笠市立中央中学校を卒業後、家業の肥料店に従事。'73年、(株)森田商事代表取締役に就任。'69年に三笠市商工会理事に選ばれ、副会長を経て'01年会長に就任。'83年から6期三笠市議会議員、現在に至る。

三笠北海盆おどり実行委員会事務局 (0126) 2-2249・2-3591



——まず、三笠市の概要を、歴史をも含めて、教えてください。  
エゾミカサリュウとアンモナイトの化石を産出するまち

三笠市は空知地方の南部に位置し、奔別川、幾春別川、市来知川という三つの川が流れる平坦な谷奥にあります。また、一億数千年前の大型肉食爬虫類エゾミカサリュウの頭骨化石(国指定天然記念物)、アンモナイトの

化石が数多く産出することでも知られています。  
——そして、なによりも北海道の石炭産業と鉄道整備の地でもあるのですね  
北海道における石炭の歴史は、江戸時代後期の白糠地方と、幕末では後志地方の茅沼で石炭が発見されたことから始まります。一八六八(明治元)年には三笠市内でも露出した炭層が発見されました。そこで、一八七三(明治元)年には榎本武揚らによつて三笠の炭田の調査が始まられ、一八七九(明治十二)年に幌内炭鉱が開坑したのです。

一方、一八八二(明治十五)年には空知集治監(現在の刑務所)が三笠市内の市来知に設置され、囚人労働によつて手宮(小樽市)と幌内炭鉱を結ぶ鉄道が敷設されました。これは、北海道で最初 全国でも三番目の開通となります。

その後、一八八六(明治十九)年には幾春別炭鉱、一九〇二(明治三十五)年には奔別炭鉱が開坑し、この三鉱は当時の北海道の代表的な炭鉱となりました。このほかにも弥生炭鉱、唐松炭鉱などが開坑しました。幌内鉱と幾春別鉱は北海道炭鉱汽

船、奔別炭鉱は住友系列の会社に  
よつて経営され、中小炭鉱を含める  
と二十鉱を超えるほどでした。

石炭産業は、日露戦争、第一次世界大戦、日中戦争、第二次大戦後の復興など、国策によつて好況が続き、三笠市の人口も一九五九（昭和三十四）年には六万三千人にまで達しました。しかし、このころからエネルギー革命が進んで燃料の主役は石炭から石油へと切り替わる一方、炭鉱事故も相次いだことなどから各地で閉山が急速に進み、一九八九年（平成元）年にはついに歴史ある幌内炭鉱も閉山してしまいました。

——そのころ、炭鉱の人たちの暮らしは、どのようなものでしたか

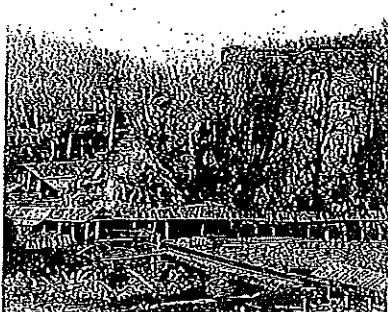
郷里を遠く離れた北国之地で  
短い夏に燃えた盆踊り

炭鉱が開坑したころ、地元には人が少ないので東北や北陸、九州などから多くの人が移住してきました。私の家もそうでしたが、次男や三男は郷里にいても耕地を分け与えてもらうことができませんから、「口減らし」のためによその土地へ出て行かねばならず、重労働ではあっても新しい土地での新しい仕事である炭鉱の従業員として働きにやって来たのです。

そのような人たちの生活は、「炭



開拓当時の幌内炭鉱



石炭が踏出したがけのそばに開坑した春別炭鉱  
『明治大正村の北海道』(北海道大学図書刊行会)から

# 炭鉱に生きた人びとの生活文化 『北海道おどり』を後世に伝える

住」と呼ばれる木造の粗末な棟割り長屋暮らしから始まりました。一棟に十数世帯が薄い壁を隔てて暮らすという状態が長く続きましたが、みんな開けっぴろげで温かく、他人同士でありながら親戚以上に助け合うなど濃密な近所づきあいがおこなわれていました。

坑内員の勤務は一番方、二番方、三番方と一日三交代。ヤマ（炭鉱）全体で作業の安全を願いながら暮らしていました。きびしい労働の慰安のために会社はいろいろな娯楽施設を

建て、映画や芝居、歌謡ショーなどを興行したときはたいへんな賑わいでした。しかし、それ以上に盛りあがったのは、お正月と神社の祭典、そして盆踊りだったのです。

北海道のお盆の大半は太陽暦の八月十三日からおこなわれ、十六日がピーク。その日が来るのが待ちきれず、七夕祭りが終わつた翌日ごろからあちこちのヤマの集落で稽古を始めて太鼓の音が周囲の山に響き、やがて地域ごとに大きなやぐらが組まれます。

私の体験した戦後の盆踊りも、八月十三日から十六日までの四日間、

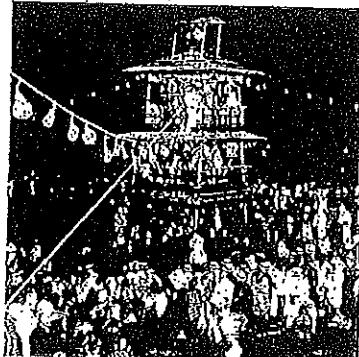
月十三日から十六日までの四日間、

いま、金道で翻られている大半は『北海盆唄』ですが、そのルーツは三笠市にあるのですね

『北海盆唄』のルーツは情熱的な『ベッヂョ節』

そうなのです。それも、私の育つた幾春別が「北海盆唄」の發祥地なのです。

春別は、熊本や徳島からの集団移住者によつて形成された集落です。旧国鉄幌内線の終着駅が設置され、一九六〇（昭和三十五）年の人口は約七千三百人にまで及び、ほとんどの商工施設が整い、三笠の中心街は幾春別といわれるほどでした。とくに市民の足を幾春別に引き寄せたのは金融機関がそろつていたことと、飲食店が五十四軒もあつたことです。



1950年ごろ幾春別で描された益踊りの脇わい

ですから、ハイヤーもない時代に、八九郎も離れた観内から飲みにやつて来る人でいつも賑わっていました。ですが、朝早くまちの中を歩くと必ずといっていいほど道路にお金が

落ちていたと言わされました。  
そのような幾春別の中島地区に広  
場があり、明治の中期から、いのちを  
を張つての過酷な炭鉱労働や、自然  
と闘つて開拓する人びとが、きびし  
い生活の苦労を療やすため、それぞ  
れの郷里の盆踊りをこの炭山でもお  
こなうようになつたのです。そのな  
かで、とくに情熱を込めて歌い継が  
れ、踊り継がれてきたのが「ベツ  
チヨ節」と「ベツチヨ踊り」という  
ものでした。

く、若い男女の出会いの場でもありました。当時、若い男女が気軽に交流する機会はきわめて少なく、わずか年中行事の時だけは世間も大目に見てくれたのです。

大やぐらの下で右回り、左回りと何重にも交差して踊る輪の中で、男はたくましく、女はしな良く踊る相手に目星をつけ、おおらかで性的な唄や踊りにつられてたがいに情熱をかき立たせ、やがて夜陰にまぎれていく、そんな豊踊りの光景が長く続いていました。

は、私が子どものころにもまだ残つていましたが、歌詞にも踊りの所作にも性を讃嘆するわいせつな表現が多く、足で土を思い切り蹴り上げることを繰り返します。そのうえ、手の振りと合わせながら三歩進んで二歩下がる所作なので、なかなか前に

盆地踊りは単なる慰安の場ではなく、若い男女の出会いの場でもありました。当時、若い男女が気軽に交流する機会はきわめて少なく、わずかな年中行事の時だけは世間も大目に見てくれたのです。

大やぐらの下で右回り、左回りと何重にも交差して踊る輪の中で、男はたくましく、女はシナ良く踊る相手に目星をつけ、おおらかで性的な唄や踊りにつられてたがいに情熱をかき立て、やがて夜陰にまぎれていく、そんな盆地踊りの光景が長く続いていました。

一九四〇（昭和十五）年のことが、北海道民謡の大家である今井竜山さんが幾春別を訪れ、この歌の素晴らしさに心打たれたとのことです。それから十年後の一九五〇（昭和二十五）年、今井さんはこの唄のメロディーと踊りの所作は残し、歌詞だけを公募して「炭坑盆踊り」とし、一九五四（昭和二十九）年には「北海炭坑節」としてレコード化しました。三年後、それを聴いた東京のレコード会社が「北海盆唄」として発売。さらに、「一九五九（昭和三十四）年に民謡歌手だった三橋美智也さん

往年の大やぐらを復活させた巨木な三回やぐら



2002年の盆踊り風景

が歌い、北海道各地の盆踊りに採用されるようになつたのです。  
この唄の生命力は、それだけではありませんでした。一九七一（昭和四十六）年に、ザードリフターズがテレビ番組の「8時だヨ／全員集合」で十四年間も「ドリフ音頭」として歌い続け、全国の人びとに親しまれるようになりました。

一方、十八年間も「北海盆唄」のルーツを探る研究をしていた人が、隣町の岩見沢市にいました。当時、北海道教育大学岩見沢校教授で、北海道民謡連盟最高帥範でもあった吉田昭穂さんです。吉田さんは一九九二（平成四）年に、長年の研究成果から「北海盆唄のルーツは、三笠の炭鉱に伝わる『ベッチャヨ節』である」と日本民俗音楽学会で発表したのです。

三笠市では、一九九三（平成五）年には、「北海盆唄」の演奏基準を統一して後世に歌い継ごうと北海盆唄基準策定委員会が組織され、第一回北海盆唄全国大会の開催にこぎつけました。

昭穂さんは、三笠の炭鉱が一九八九（平成元）年に閉山して、三笠市の炭鉱の灯はすべて消え去りました。しかし、幾春別などいくつかの地域では、細々ながら盆踊りは継続されていました。そこで、「北海盆唄発祥の地」のお墨付きを得たのを契機に、三笠市中央公園で全市的な盆踊りを開催しました。すると、年を重ねるごとに、全国に散つていた元炭鉱員たちが家族や仲間と誘いあつて帰省し、この盆踊りに参加するようになってきました。

三層の大やぐらを再現し往年のにぎわいを復活させる

——そのころ、北海道の炭鉱は衰退していたではありませんか

テレビ番組の「8時だヨ／全員集合」で十四年間も「ドリフ音頭」として歌い続け、全国の人びとに親しまれるようになりました。

北海道の炭鉱史に輝かしい業績を残した幌内炭鉱が一九八九（平成元）年に閉山して、三笠市の炭鉱の灯はすべて消え去りました。しかし、幾春別などいくつかの地域では、細々ながら盆踊りは継続されていました。そこで、「北海盆唄発祥の地」のお墨付きを得たのを契機に、三笠市中央公園で全市的な盆踊りを開催しました。すると、年を重ねるごとに、全国に散つていた元炭鉱員たちが家族や仲間と誘いあつて帰省し、この盆踊りに参加するようになってきました。

全国大会の優勝者が歌い手となり、太鼓や笛などのお囃子にのつて踊る輪は幾層にも連なり、往年の活況が復活する賑わいをみせるようになりました。すると、年を重ねるごとに、全国に散つていた元炭鉱員たちが家族や仲間と誘いあつて帰省し、この盆踊りに参加するようになってきました。

三笠市の人口は、現在一万一千六百人ですが、将来は一万人以下に減少するかもしれません。しかし、この「北海盆唄おどり」と「北海盆唄」は、三万人ほど動員する事業にしたいと思っています。とは言つても、私たちには、これを単なる観光イベントとは考えていません。実行委員長の私は三笠市商工会の代表でもあります。しかし、この事業の所管が三笠市教育委員会であるのは、市民文化とらえているからです。

北海道の炭鉱産業の発祥地として百二十年も栄え、その暮らしの中から育まれた文化を、私たちはなんとしても後世に引き継がねばなりません。そのためには、資金も必要ですが、経済優先の考え方方に立つのではなく、文化の継承のために市民みんなで負担していく。私は、その理解を深める努力をしていかなければならぬと思っています。



仮装大会の定番ともいえる男の嫁入り姿(左)、往年の女踊りを再現させる花笠姿(右)

撮影/藤沢信枝  
写真協力/三笠北海盆唄実行委員会